

## 論文審査の結果の要旨

氏名：四 家 昌 博

専攻分野の名称：博士(芸術学)

論文題目：保育者、小学校教員養成課程におけるピアノ初学者へのピアノ指導-効果的な  
ピアノ学習のための新しい教材の開発-

審査委員：（主査） 教授 蛭 子 麗 貞  
（副査） 教授 田 代 幸 弘 教授 土 野 研 治  
講師 平 野 昭

本論文は、保育者、小学校教員養成課程におけるピアノ初学者への効果的なピアノ指導を目指し、そのために効果的に学習することの出来る新しい教材を開発し、またその教材を使用して養成校における授業を実践し、評価を行ったものである。保育士や幼稚園教諭、小学校教諭を目指すピアノ初学者が、大学や短期大学等の養成課程において、18歳で全く初めてピアノを学習し始めるということ、また短期間に演奏技能を習得するということに焦点を当て、初学者が、養成校において効率良く学習を進めることができるようなピアノ教材になるように留意し作成している。実際、論者は2018年4月からS女子大学人間学部の保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の養成課程におけるピアノの授業に於いて自ら開発編纂した教材を使用し授業を行い、成績や自己評価アンケート、教員の意見などを考察し、この教材を評価している。本論文は第1章から第6章(結論)の全6章構成になっている。

第1章では、本研究における背景、目的を説明し、その研究方法について記述している。研究の背景には、論者がこれまで保育者、小学校教員養成の音楽教育やピアノの指導に携わってきた実体験がある。こうした養成校では、大学入学後に初めてピアノを学習する、という学生の割合が低くなく、また短期間の修養年限、限られた短いレッスン時間で一定の演奏能力の取得が求められるのが実態であり、養成校でのピアノ学習に、よりふさわしい学習教材を検討する必要があると考え、新しい教材の開拓作成を試み、その成果を考察している。研究の方法として、教材の作成にあたり、これまで養成校で使われてきた教材について比較、分析し、そこから見えてくる問題点を考察した。また、実際の保育、教育の現場に勤務する保育士、幼稚園教諭、小学校教諭への質問紙やインタビューによる調査を行っている。短期間でこのような作業を基に、新教材作成へ繋げたことを評価したい。保育、教育の現場が求めるピアノや音楽に関する能力、現場で歌われている歌、ピアノの活用法などについて明らかにした。また養成校でピアノを指導する教員を対象に、初学者へのピアノ指導の際に留意していることや、初学者が苦手としているテクニックの要素、その指導法などについて調査し、教材作成の一助とした。これらの結果を活用して教材を開発、作成し、更に、その教材を使用して授業を実施した。

第2章では、保育者、小学校教員養成課程におけるピアノ教育の現状について論じている。

「保育者、小学校教諭養成の現状」として、保育士、幼稚園教諭、保育教諭、小学校教諭それぞれの人数の推移について、また養成校の新入生のピアノの能力について、調査結果や先行研究をもとに考察した。近年において、保育士、幼稚園教諭、保育教諭、小学校教諭の人数は増え続けており、それぞれの養成校も増加している。社会的に保育者や小学校教諭の必要性が高まっていることが判明した。改正、改訂が行われた保育所保育指針、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領等について、「音楽」の視点から考察している。保育士養成のカリキュラム、科目について、平成22年の改正時に、「音楽」、「表現」という点で大きな変更があった。養成課程のカリキュラム編成の変更について、これまでの経緯にも着目しながら、今後も継続して検討する必要性を論じている。また、養成校向けに作成された既存のピアノ教材のうち、8つの教材について比較、分析し、初学者にとって十分に配慮されているか、という観点で考察している。保育者、小学校教員養成課程での活用のために、工夫されている部分が見受けられるものもあったが、初学者が学習するには、教材の開始から難易度が高いと思

われるものや、姿勢やフォームなどの視覚的な説明が少ないこと、また多くの教材が「バイエルピアノ教則本」を底本として作成されており、充分初学者に対して配慮がなされている教材は見当たらなかった。この事は、ピアノ演奏者でもある論者が、常に疑問を持っていた観点であり、本論文での新教材への考察に繋がっている。

第3章「保育・教育の現場が保育者、小学校教諭に求めるピアノ、音楽に関する能力」では、保育者への質問紙調査、また小学校教諭へのインタビューによる調査を中心に、その結果を報告している。保育士試験の実技試験は、現在は「音楽表現」に関する技術、「造形表現」に関する技術、「言語表現」に関する技術の3つの分野から2分野を選択して行われており、「音楽表現」に関する試験の内容は、「弾き歌い」であること、また伴奏楽器はピアノに限らず、ギター、アコーディオンも認められていることに注目している。次に「保育、教育の現場におけるピアノや音楽に関する調査」について、結果を報告し考察している。今回の質問紙調査では、保育所(園)、幼稚園、幼保連携型認定こども園に勤務している、保育者571名から結果を回収することができ、その回答から、保育、教育の現場における「弾き歌い」、「歌を歌うこと」、「子どもと一緒にピアノや音楽を楽しむこと」の重要性を論じている。小学校教諭に対するインタビュー調査の結果からは、学級担任と音楽専科の教員とでは、求められる内容が異なるが、最低限の能力として、「右手で旋律を弾きながら歌を歌えること」が必要とされることが分かった。また、実際の教育現場の保育者からも、小学校教員からも、ピアノを弾きながら歌を歌う「弾き歌い」の能力の必要性と重要性が示された。

第4章では「初学者への効果的な指導法の考察」を論述している。養成校でピアノを指導する教員への質問紙調査の結果を報告している。今回の調査では、初学者が苦手とする要素として「両手を別々に動かすこと」が多く報告された。また、ピアノ実技の授業で、ピアノ奏法そのものよりも、楽譜の読み方や練習の仕方など、副次的な指導も必要であることが示された。さらに、学生が意欲をもってピアノに取り組めるよう、精神面への配慮についての多くの意見が寄せられた。このことから養成校での授業に於いて、実技的修得のみならず、音楽やピアノに関する座学などを踏まえた初年次教育の重要性を論じている。

第5章では、教材の開発、作成に関し、着想を得たさまざまな参考教材の底本や原資になったものについて、また作成した教材での授業実践と、その結果からの教材の評価について論述している。第1節では、日本のピアノ教育の黎明期の教材である、『バイエルピアノ教則本』、『リチャードソンのニューメソッド』、『ウルバッハ教則本』、『ニューイングランド音楽院ピアノメソッド』の4つの教材について論じた。第2節ではフランスの統括的な音楽教育システムであり、既存の音楽作品をソルフェージュ課題に取り入れ、音楽作品の理解と表現を深める「フォルマシオン・ミュージカル」の理念が、保育者、小学校教員養成課程における初学者へのピアノ指導にも有用であると論じた。第3節では、実際の教材作成において考慮したことについて、また授業の実践の結果について報告を行っている。学習内容や課題、到達目標は同一とし、これまで使用していた教材を使って授業を行うグループと、新しい教材で授業を行うグループとに分け、両者の成績と自己評価の結果から、また同時に授業を実践した教員の意見等から、教材を評価している。グループの違いによって、学生の成績の平均や、自己評価自体には有意差は見られなかったが、「成績と自己評価の関わり」を見ると、これまでの教材を使用したグループでは、個人の成績と自己評価の関係が一致しない学生が複数みられたが、新しい教材を使用して授業を行ったグループでは、ほとんど一致しており、新しく開発した教材が、自己認識の適正化に効果を発揮していることが明らかにされた。アンケート調査、インタビュー、実際の授業など多くの視点から検証を行い、今まで見落とされていたさまざまな問題点を突き止めたことは、大いに評価でき、更なる新教材開発の可能性を高めた。

第6章では、本論のこれまでの考察、結果を総括し、結論を述べた。ピアノ初学者への授業の内容や課題、目標は同じであっても、教材や指導の方法の違いにより、学習の結果について自己認識が適

正にされる、という結果となった。このことはピアノの学習への意欲向上や、課題や練習への取り組みへの動機づけに、また適切な自己肯定感につながり、目標の設定や達成への見通しを持ち、能力向上のための主体的な活動をするにあたって、有用な一助になり得る、と結論づけた。

論者は自身のピアノ演奏の体験を通して、保育士養成の視点から新教材を作成したことは、高く評価できる。検討の余地はあるものの、今後の保育士養成のピアノ実技、音楽研究において新たな道を切り開く論文となっている。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 31 年 1 月 28 日